

序

スロヴェニア語はインド・ヨーロッパ語族スラヴ語派に属する言語である。現代のスラヴ語の中では、セルボ・クロアチア語、ブルガリア語、マケドニア語とともに南スラヴ語のグループを形成している。南スラヴ語群はさらに東と西のグループに分けられるが、スロヴェニア語はセルボ・クロアチア語とともに西のグループに含まれる。

ではスロヴェニア語とはどのような人々によって現在話されているのだろうか。スロヴェニア語を話している人々は大別して3つのグループに区分できる。第1のグループはスロヴェニア共和国に住む人々である。その人口は200万人を数えるが、そのうちスロヴェニア語を話している人々の比率は約90%であり、残りの約10%はセルボ・クロアチア語を話している。第2のグループは主にオーストリア、イタリア、ハンガリーに住む少数民族としてのスロヴェニア人、そしてアメリカ合衆国、オーストラリア、ニュージーランドならびに世界の他の地域に散らばっているスロヴェニア人の移民が第3のグループを形成している。

この論文において取り上げるテーマは16世紀におけるスロヴェニア語の語彙についての研究である。その前提として、まず16世紀までのスロヴェニア語をめぐる状況についての概略を述べる。

活字で印刷された文献が最初に現れたのは16世紀になってからである。この時期にはじめてスロヴェニア語の文語を確立しようという運動が起こった。この運動は16世紀の宗教改革の流れにおいて現れたものであった。この流れにおいて、1550年にプロテスタントの宣教師で

あるプリモジュ・トゥルバル (Primož Trubar, 1508-86) によってはじめてスロヴェニア語の書物がテュービンゲンにおいて2点出版された。そして1584年にはスロヴェニア語にとって重要な著作が2点公開された。1つはユーリィ・ダルマティン (Jurij Dalmatin, 1546-89) による聖書全体の翻訳であり、もう1つはアダム・ボホリッチ (Adam Bohorič, 1520-1598 以降) によってラテン語で書かれたスロヴェニア語文法であった。1592年にはスロヴェニア語にとってはじめての大辞典がヒエロニウムス・メギセル (Hieronymus Megiser) によって著わされた。

メギセルによるスロヴェニア語の最初の大辞典 “*Dictionarium quatuor linguarum*” は、その名の通り4言語の対訳辞典である。ドイツ語を見出し語としており、各々の語にラテン語、スロヴェニア語、イタリア語の対訳語がつけられたものである。

この修士論文で扱うのはこの辞典におけるスロヴェニア語の語彙である。スロヴェニア語のまとまった語彙を収録している最古の資料であるという価値は大きく、その体系を分析することはスロヴェニア語史の後の時代における語彙の変遷や、他のスラヴ諸語との比較において有益な情報を提供することであろうと考える。

本論文で直接の資料として用いるのは、メギセルの版そのものではなく、アンネリース・レーグライト (Annelies Lägreid) によって再編集されたもの “*Hieronymus Megiser, Slovenisch-deutsch-lateinisches Wörterbuch : Neugestaltung und Faksimile der ersten Ausgabe aus dem Jahre 1592. Wiesbaden. 1967.*” を使用する。このレーグライト版は、スロヴェニア語を見出し語としており、その対訳語としてドイツ語、ラテン語を載せている。イタリア語については必ずしもすべての語に対して付されていない。

I メギセルの辞書における語彙の構成

まず、メギセルの辞書について分析するにあたり最初に行うべきことはその全体像の概観である。これは後に行うあらゆる分析の基礎となるため、重要な意味を持つことになる。

メギセルの辞書の中に収録されている語彙について、その見出し語

の総数は 4628 語である。その基礎的分析として第一に取り上げられるべきことは、これらの語彙の構成についての分析ということになる。

メギセルの辞書に現れる語彙総数 4628 語のうち動詞不定形は 1066 語と、全体の実に 23%を占めている。したがってそれ以外の品詞ないし動詞派生形（動名詞、被動形動詞）は 3562 語である。これらの語彙を概観すると、全体的にはメギセルの語彙もスラヴ語としての外観を保持するには十分であるといえる。

語彙全体の構成を考えるにあたっては、通常のアルファベット順の語彙一覧を参照することは言うまでもなく必要ではあるが、必ずしもそれだけでは十分ではない。逆引きの語彙一覧を作成し、異なる側面から語彙の数・構成・体系などを把握する必要がある。そのための基礎的資料として、語彙総数 4628 語のうち動詞不定形 1066 語を除いた 3562 語についての逆引きの語彙の索引を制作した。これに基づき様々な角度から分析を行う。

II スラヴ語共通の語彙

メギセルの辞書におけるスロヴェニア語の語彙は、ドイツ語をはじめとする周辺諸民族の言語の影響を色濃く受けている。一見して明らかかなことであり、また当然のことではあるが、この中の語彙の多くは純粋なスロヴェニア語の語彙ではないし、当時の平均的なスロヴェニア人が使っていた語彙を忠実に反映したものでありえない。この辞書は 16 世紀におけるスロヴェニア語の文語確立を目指す運動の中で生まれたものであり、当時文語を理解し、また文語で表現できる人はごく限られていたであろうことは容易に察せられるところであるからである。

しかしながら、その語彙の中にはスロヴェニア語の特徴を如実にあらわしているものが少なからずあることもまた事実である。それはすなわち共通スラヴ語の時代から受け継がれた一群の語彙である。

メギセルの辞書の語彙からスラヴ語共通の語彙を抽出するにあたり、František Kopečný. *Základní všeslovanská slovní zásoba*. Praha. 1981. を参照する。この本にはスラヴ語共通の語彙が 1938 語解説されており、4628

語を有するメギセルの辞書と対照するにあたって量的にもバランスが取れている。この両者を比較し、両者に共通している語彙を抜き出す。つまり、それらはメギセルの辞書におけるスラヴ語固有の語彙を意味する。その数は 932 語に上る。この数はメギセルの語彙の 20%、コペチュニーの語彙の 48%に相当する。

Ⅲ ドイツ語に対応する語彙

ドイツ語の語彙を直接借用している例は非常に多い。本論文においてはドイツ語からの借用語を検討するにあたって、明らかにそれと分かるの語彙 347 語を対象として考察する。

最初に個々の語彙が受け入れられた際にその語彙がどのように変形されて（あるいは変形されずに）入っていったのかについてその種類に応じて分類し、さらにその各々について検討を行う。

本章で行う考察の概要は次の通りである。

音韻的分類

(1) 母音の交替

i) ウムラウトした母音：ウムラウトしない母音

① ä : a, e

② ö : o

③ ü : u, i

ii) 二重母音：単母音

④ ai : a, e, o, j

⑤ ei : e, i

⑥ ia : a

⑦ ie : e

iii) ⑧ e : なし

(2) 子音の交替

i) 有声音：無声音

① b : p

② d : t

③ sch : ž

ii) 閉鎖音：摩擦音

④ ck(k) : h

iii) 摩擦音：閉鎖音

⑤ w : b

iv) ⑥ h : なし

v) 破擦音：摩擦音

⑦ pf : f

vi) 硬子音：軟子音

⑧ s : ž

⑨ st : št

⑩ l : lj

形態的分類

- ① 元の形のまま取り入れられた語
- ② 語尾に -a が付加された語
- ③ 動詞不定形とその派生形
- ④ 名詞・形容詞の接辞が付加された語
- ⑤ 合成語

IV 接尾辞

この章ではメギセルの辞書における語彙にあらわれる接尾辞について考察する。ただしあらゆる接尾辞を網羅するのではなく、主要なものについてのみ検討する形を取る。該当する 18 種の接尾辞をその機能によって分類すると、次のようになる。

形容詞派生名詞形成接尾辞

形容詞から名詞を作る際に用いられる接尾辞。

-oba, -ota, -ost の 3 種。

動詞派生名詞（動名詞）形成接尾辞

動詞派生名詞（動名詞）を形成する接尾辞としては、

-anje, -enje, -tje の 3 種がある。

その他名詞形成接尾辞

指小形を形成する接尾辞 -ica, -inja, -ka

抽象名詞を形成する接尾辞 -stvo (-čtvo, -štvo)

など

形容詞形成接尾辞

形容詞を形成する接尾辞として最もよくあらわれるのは、
-ski (-čki, -ški)。この他に、-ljiv がある。

物主形容詞を形成する接尾辞 -ov, -in

など

形容詞形成接尾辞の後にさらに接尾辞が付加されているもの

-ljiv-ec, -ljiv-ost

V 語彙体系

本論を締めくくるこの第5章においては、語彙体系についての分析を行う。その前に、語彙体系とは何か、そのことについて簡単に定義しておきたい。

ここで語彙体系という言葉を使って指すものは、意味的に相互に関連している一連の語彙である。この場合の意味とは、語彙的にだけではなく文法的な意味も含まれる。こういった意味において、一般に言語は多数の語彙体系を保持している。

それらの中には、どの言語にとっても欠かせない体系と、言語によっては必ずしも保持されていない体系とがあることが確認できる。ここでは仮に前者の体系を一般体系、後者の特殊体系と呼ぶことにする。

一般体系については、言語によって体系としては同じであっても、それを構成する語彙要素が必ずしも同じとは限らない。

特殊体系とは、各々の言語の個別的な要素の現われである。この体系の中には一つの言語に見られるものだけではなく、一群の言語の間にのみ存在するものも含まれる。

さて、メギセルの辞書において体系は基本的にはスラヴ語一般の体系に準じている。したがって、その多くはここで改めて検討するに及ばない。

ところが、月の名称の体系についてはかなり異なった様相を呈している。実はこの一連の月の名称こそがメギセルの辞書における語彙体系の中で際立って興味深く、また特殊な体系を示しているのである。メギセルにおける月の名称の体系を具体的に分析する前に、現代のスラヴ諸語においてこの体系がどのようになっているかについて触れておきたい。

スラヴ諸語における月の名称の体系を概観してみると、大きく分けて2つの系統があることが分かる。1つはラテン語起源のものであり、この体系は英語やドイツ語、フランス語など、西ヨーロッパの言語に一般に見られる馴染みの深いものである。これに対して、もう1つはスラヴ語固有のものであり、スラヴ語の他にはまったく見られない体系である。

ラテン語起源の体系では、それぞれの月の名称について、各言語間で大きな違いはあまり認められない。スラヴ語固有の体系は、前節の体系と比べるとかなり複雑である。スロヴェニア語の月の名称の体系については前述の通りラテン語起源の体系であり、その形態に特別なものは認められない。

しかしながら、現在では用いられていない古い体系として、スラヴ語固有の体系を有していた。

スラヴ語固有のチェコ語・ポーランド語・クロアチア語の3言語の体系にこのスロヴェニア語の体系を比較してみると、異なる側面が見えてくる。

また、メギセルの体系にあらわれる独自の語彙に対する研究は、スラヴ語の範疇には収まりきらない。そこでこの体系を検討するには、ドイツ語の形を調べる必要がある。

メギセルにおいて月の名称の体系の中に接尾辞 **-nik** を持つ語が4つ (**majnik, prašnik, jesenik, obročnik**) ある。月の名称でこの接尾辞を有するのは、他のスラヴ語においてはポーランド語で10月を指す **październik** の1語のみである。したがって、月の名称でこの接尾辞 **-nik** を持つ語彙はスラヴ語本来の月の名称の体系の語彙ではありえない。つまり、上の4語は後から派生的に形成されたものである。月の名称が派生的に形成される際の接尾辞として **-nik** が用いられているのである。

4語のうち *obročnik* は聖書の中でのみ用いられる特殊な語彙であるから、ここでは考慮しないとすると、他の3語は対応するドイツ語の語彙から形態的もしくは意味的に影響を受けている。外来的（ここではドイツ語の）要素と結合して月の名称を形成すること、これは接尾辞 *-nik* の持つ機能の1つである。

このように見てくると、全体的に、スラヴ語古来の体系を少しずつドイツ語の体系に、ひいてはラテン語の体系に合わせていこうとする傾向が見られる。そのあらわれの具体的例の1つが翻訳借用であり、また形態的に借用することなのである。

また、従来は対応する語彙を持たなかった月について、ドイツ語などの体系に合わせようと、その前の月の意味範囲を次の月にも拡大した。その手段として用いられたのが、大一小 (*veliki* – *mali*) を加えることであった。この対立において基本となるのは小 (*mali*) の方であることは既に確認した通りである。

まとめ

本論の5つの章は互いに独立しているが、互いに無関係ではありえない。むしろ、相互に密接に関連しているといっていよう。これらの要素が有機的に絡み合い、その結果としてメギセルの語彙の全体像を描き出すことができた。

本論文において語彙体系として検討したのはこの月の名称の体系だけであるが、この体系こそがメギセルの語彙の特殊性を如実に示しており、それをまとめあげた意味は大きい。

こうして、全体から、あるいは外的・内的要素という風に様々な側面から分析を行うことで、メギセルの辞書における語彙の性格は次のように結論づけられる。

1. 外来語（特にドイツ語からのもの）が語彙全体に占める割合が大きい。
2. 外来語を取り入れる際には極力スロヴェニア語の音韻体系に適合するように変形させている。
3. 2つ以上の語彙要素からなる合成語は時としてその外観を一変さ

せ、あたかも単純語のような形であられる。

4. 本来のスラヴ語としての体系とドイツ語など周辺諸民族の言語の体系とが複雑に入り混じり、その結果両者の要素を含む特殊な語彙体系を示している。
5. それはスラヴ語の体系を外来的体系に適合させようとする動きである。
6. 語彙的に多様な要素を含んでいるけれども、その形態的・音韻的に基本となっているのはやはりスラヴ語としての性格である。つまり、あくまでも全体の枠になっているのがスロヴェニア語であることには変わりなく、その中で存在するいろいろな要素の選択肢のうち、この辞書の中の語彙においては外来的なものが多くなっているに過ぎない。

参考文献

Lägreid, Annelies. Hieronymus Megiser : Slovenisch-deutsch-lateinisches Wörterbuch : Neugestaltung und Faksimile der ersten Ausgabe aus dem Jahre 1592. (Hieronym Megiser : Slovensko-nemško-latinski slovar : Preureditev in posnetek prve izdaje iz leta 1592.) Otto Harrassowitz. Wiesbaden. 1967.

Kopečný, František. Spolupracovali Eva Havlová, Hermína Plevačová, Antonín Mátl. Základní všeslovanská slovní zásoba. Academia. Praha. 1981.

Horálek, Karel. Úvod do studia slovanských jazyků. Československá akademie věd. Praha. 1955.

Pirjevec, Dušan., Mihelič, Stanet., Kos, Janko. ed. Slovanska književnost : izbrana dela in odlomki : prva knjiga. Mladinska knjiga. Ljubljana. 1966.

Bohanec, Franček., Jamar, Marija., Kos, Janko. ed. Slovanska književnost : izbrana dela in odlomki : druga knjiga. Mladinska knjiga. Ljubljana. 1965.

Toporišič, Jože., Gjurin, Velemir. ed. Slovenska zvrstna besedila. Izobraževalna skupnost Slovenije, Kulturna skupnost Slovenije, Raziskovalna skupnost Slovenije. Ljubljana. 1981.

Toporišič, Jože. Jezik, slovenski (slovenački) ; Enciklopedija Jugoslavije 4. Izdanja i naklada leksikografskog zavoda FNRJ. Zagreb. 1960.

Barbarič, Štefan. Slovenci : IV. književnost ; Enciklopedija Jugoslavije 7. Izdanja i naklada leksikografskog zavoda FNRJ. Zagreb. 1968.

Albretti, Andrea. Colloquial Slovene : A complete language course. Routledge. London and New York. 1995.

Katzner, Kenneth. The languages of the world : New ed. Routledge. London and New York. 1995.

千野 栄一「スロベニア語」(『言語学大辞典 第二巻』)三省堂. 1989.

スティーヴン・クリソルド編, 田中 一生・柴 宜弘・高田 敏明 共訳『ケンブリッジ版 ユーゴスラヴィア史 (第2版)』恒文社. 1993.